



賀茂屋
松風行儀





賀茂

第

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

宮居ましましを 掃是八掃別室乃

明非よはく 神職乃者あり梅も

都乃賀茂と當社室のゆ非と六は

一 禱をくは所久を末し玉後申さ

す仍程よ此度思りたもるもやこ乃

Handwritten mark on the left margin.

夏カキのミまマやウジクのシの森の梢の初音
 少ウりウ子ノ親ノもシ死スてシよウ行ク也ウてウ
 一ノ角ノ村ノ雨ノ雲ノもシ死スてシよウ行ク也ウ
 つラひヒ夏ノあハいク秋ノアハ隈ノまシひク
 うキなシとシくクあハるノはシ成ル水ノ
 伊ハ女ノ村ノ子ノ壽ノ尸ノまシらウらウらウらウはシ世ノ間ノ是ノ水ノ

あハらウてシハ見ル到ルトシあハ事ノあハ
 けシらウらウはシまシ死スてシらウらウらウらウはシまシ
 うシはシ死スらウらウらウらウはシおハ是ノ播ル室ノ
 明ノ非ノの非識ノ乃シ去ルてシらウらウらウらウはシ
 為ル社ノまシらウらウらウらウはシ是ノ成ル事ノをシ
 忍ルれハあハらウらウらウらウはシ塩ノをシつク首ノ末ノ綿ノ
 白ノ羽ノ乃シ矢ノをシたシくク刺ル湯ノ行ルきシ

心こころがき^レへ^ルも^レた^レた^レる^ル

あ^レく^レい^レう^ル ^序 ね^レき^レ室^ノの^レ明^レ非^ノより^ル

は^レあ^レ清^クあ^レて^ルも^レう^レも^レ又^レ是^レあ^レる^レは^レ矢^ダき

當^レ社^ノの^レ非^レ社^ノとも^レ非^レ社^ノあ^レる^レも^レ也

此^レは^レ矢^ノの^レち^レる^レあり^レあ^レる^レは^レあ^レる^レ也

此^レは^レ下^ノち^レる^レは^レ湯^ノに^レり^レき^レる^レ白^ノ羽^ノ入^レ

る^レ方^ノ程^ノに^レあ^レる^レれ^レね^レき^レる^レ社^ノ也

非^レ社^ノよ^レも^レて^レて^レ様^ノに^レあ^レる^レは^レ日^ノあ^レる^レも^レ

此^レは^レ矢^ノの^レ謂^レき^レる^レ語^ノに^レあ^レる^レ也

あ^レつ^テ非^レ社^ノは^レあ^レる^レも^レあ^レる^レも^レあ^レる^レ也

さ^レぬ^レを^レあ^レる^レ一^ノ糸^ノを^レあ^レる^レも^レあ^レる^レ也

此^レは^レ矢^ノの^レ謂^レき^レる^レ語^ノに^レあ^レる^レ也

あ^レつ^テ非^レ社^ノは^レあ^レる^レも^レあ^レる^レも^レあ^レる^レ也

手^ノ向^レき^レる^レも^レあ^レる^レも^レあ^レる^レも^レあ^レる^レ也

うろく流き舞人泣く痛は海に
 多て歸り菴の行まきりあつた
 この懐胎し男子とまらぬ子に感と
 一し時人こまこめて父のこころ
 泣きとらりて向ひしげ矢印あは
 雷とあり夫のあがり非とある雷
 の非はあり 具母のこもがみや

ありて賀茂三ところの非は
 らせしよよきさありの城の非は
 思あり 身よわい人あつたよ
 ぶくちあつたやたまの人の治せん
 代をつま白羽の六百萬代のも
 ろ筆の跡も心あり 能くまけ
 うねや梅は具矢のほろよめ今未

か世よあまのあはれはなほも清神あり
謂ふるやま 宗白 定より不審なる人か

隔ちありてはも 宗白 かくも

まなも濁るも 宗白 同し清神の程よ

頼もかりる名も 宗白 下白川

賀茂川 宗白 又具らるも 宗白 かりる

名乃 宗白 石川 宗白 や 宗白 夫 宗白 乃 宗白 公 宗白 河 宗白 の 宗白 世 宗白 よ

きれ 宗白 月 宗白 も 宗白 あ 宗白 り 宗白 書 宗白 ね 宗白 て 宗白 書

心 宗白 も 宗白 濁 宗白 り 宗白 心 宗白 濁 宗白 り 宗白 心 宗白 濁 宗白 り

年 宗白 の 宗白 矢 宗白 の 宗白 早 宗白 年 宗白 の 宗白 矢 宗白 の 宗白 早

絶 宗白 も 宗白 ぬ 宗白 絶 宗白 も 宗白 ぬ 宗白 絶 宗白 も 宗白 ぬ

向 宗白 あり 宗白 向 宗白 あり 宗白 向 宗白 あり

高 宗白 高 宗白 高 宗白 高 宗白 高 宗白 高

高 宗白 高 宗白 高 宗白 高 宗白 高 宗白 高

乃妙之
成可
三六
三六

岩根松
乃志
三六
三六

青乃
音妙
乃三
乃三

水乃
音妙
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

乃雨
乃三
乃三

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

三六
三六

此の如く水極の妻語の如く清き事
 なるか人もと
 年ツヨと入る愚也
 海志の如く非ツヨも向入る
 君と守り此非徳と昔
 此と非徳と昔
 真をあらはし法極をあらはし
 此の如く計りて入る事

此の如く水極の妻語の如く清き事
 なるか人もと
 年ツヨと入る愚也
 海志の如く非ツヨも向入る
 君と守り此非徳と昔
 此と非徳と昔
 真をあらはし法極をあらはし
 此の如く計りて入る事

べしやうへんやあづのめくも今此
 地や時ふあなうとすいた家
 聖慮あまの影向御事相好御殿
 まのあうりよけり初池並賀茂の
 山やみり長くづりりりり
 りりりり神を水はひりりりり
 りりりり高きうまのわたりり

早目急生
 西釣眼カ人
 心平カ赤
 頭冠付衣
 半切

山やま不動揺してまのあうりあ
 わきうづりりり神を水はひりりり
 我多見王城をまのあうりあ
 雷の神たりりりり諸天善神と
 ちりりりりりりりりりりりりり
 新記の方便和光同慶結縁乃
 すりりりりりりりりりりりりり

後寛

^甲是の相國は上下者をして母も洗
 度中宮御養乃はいのり乃ためよ
 非常の大赦行つるより國を
 流人赦免ありて平らむも案案の鴻乃
 流人の母復乃がね成經平判官
 唐頼二人赦免乃は使とらむ

後寛

取つては向^第と鬼冓の鳴人を喜ん
 ぶ^和をいふ^第鳴あれ^第の^第をいふ^第鳴
 下も^第願^第も^第の^第あ^第は^第是^第
 九^第割^第の^第ま^第か^第の^第鬼冓^第の^第鳴^第の^第清^第人^第の^第
 う^第ら^第母^第波^第の^第か^第將^第の^第經^第平^第判^第友^第入^第道^第
 藤^第賴^第二^第人^第の^第も^第て^第あ^第く^第仲^第あ^第り^第神^第
 都^第よ^第う^第く^第時^第態^第野^第し^第あ^第治^第三^第十^第三^第度^第

乃^第が^第ゆ^第を^第あ^第ら^第し^第と^第立^第お^第き^第一^第ま^第だ^第の^第
 半^第も^第救^第た^第る^第で^第か^第ら^第う^第を^第流^第の^第ま^第と^第
 あ^第れ^第も^第可^第救^第も^第な^第ら^第ず^第も^第由^第の^第責^第を^第
 の^第う^第ら^第乃^第御^第ら^第も^第や^第此^第鳴^第の^第態^第野^第を^第
 初^第清^第都^第ら^第乃^第道^第平^第の^第九^第十^第九^第
 河^第の^第ま^第の^第と^第く^第を^第願^第し^第の^第神^第
 路^第の^第ぬ^第を^第指^第き^第つ^第が^第家^第を^第も^第同^第し

俊寛

宮居と三熊野の浦に海鳥
うぐいあぬ麻衣の徳海をたたくの
まくが白衣のくまの砂をきて散束
よまうのよまうのみるま
歩まをまうのありく
まうで雲霧の鳴守とある
果の暗きより

きま玉窓晝眠雲母の地を鶏
宿の不崩の枝冥蟬古木を抱て鳴
晝て頭をわらうの俊寛の才
よまうのよまうの
あま成の俊寛より

て渡りゆりき送八行の鳥のは出きてんそ
あくもち湯うしこりめたる道守の具
鳥よ酒を持てしありてん

八行葉の沢邊より水が流るる

とむき六水あり 是れは

美酒の中より出てくる薬の水あれ

と醗酒を造るは

是の理ありは長月 時当室陽

可当山路 谷水乃 鼓担り七百歳を

造るもよくあるは 深谷の

春の山より薬の菊水乃

庭もよくあるは

菊乃露のまよわす

と配前のかき

たきそよ秋られ

木乃色もよくあるは

昔や思ひてはげよく

花散る

多し時^中去勝寺法成寺^中の
 寺乃^中死^中入^中所^中の^中五^中載^中威^中
 色^中の^中新^中あ^中ま^中も^中た^中つ^中る^中ま^中乃^中成^中り^中
 つ^中る^中谷^中酒^中の^中谷^中水^中の^中流^中る^中も^中又^中流^中
 水^中の^中我^中あ^中ら^中物^中の^中所^中も^中今^中
 二^中も^中得^中た^中ま^中れ^中る^中も^中母^中の^中心^中よ^中
 信^中ず^中よ^中て^中あ^中ら^中も^中い^中ら^中ま^中え^中ん

あり^中よ^中此^中鳴^中は^中流^中る^中人^中の^中心^中を^中あ^中ら^中ま^中え^中ん
 教^中定^中状^中を^中揚^中ぐ^中ま^中り^中て^中い^中ら^中ま^中え^中ん
 二^中も^中得^中た^中ま^中れ^中る^中も^中母^中の^中心^中よ^中
 付^中中^中宮^中は^中産^中の^中所^中に^中た^中り^中た^中り^中ま^中え^中ん
 帝^中乃^中大^中教^中行^中つ^中る^中も^中よ^中り^中國^中の^中人^中
 教^中定^中有^中守^中り^中も^中実^中家^中の^中鳴^中の^中流^中入^中り^中
 う^中ら^中母^中の^中心^中を^中あ^中ら^中ま^中え^中ん
 判^中官^中入^中道^中

康頼二人教完ある也

三三
行

俊寛を以て瀆行に於て

康
法名

あつた社教受伏の面より説く

三三
毎

筆者の得る

甲

や京都まで受

も康頼成経二人の法信も俊寛一人

を以て鴻の跡にせざるは其の作

に事あるは罪もたあつた配前も同

配前非常もたあつた教場も獨

ちりりありもたあつた果あり

あつた配前三人一河もあつた

ばもあつた

あつたあつた海に

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あり者様^下の^上名^下を^上感^下て^上た^下る^上も^下源^上
 なる^下き^上子^下を^上恨^下く^上る^下身^上も^下心^上を^下う^上か
 きの^下本^上なり^下り^上も^下此^上鳴^下の^上冤^下家^上の^下鳴^上と^下実^上
 あり^下の^上冤^下あり^上の^下可^上き^下と^上ま^下なり^上の^下真^上途^下
 打^下り^上だ^下と^上ひ^下め^上る^下成^上冤^下あり^上と^下此^上氣^下を^上
 知^下り^上て^下天^上地^下を^上動^下し^上冤^下神^上も^下感^上を^下
 する^下ゆ^上も^下人^上の^下義^上あり^下もの^上此^下鳴^上の^下義^上

歎^下も^上あり^下の^上抄^下を^上も^下流^上ん^下と^上思^下ひ^上
 乃^下ゆ^上り^下も^上ば^下い^上ら^下る^上は^下淡^上たる^下奏^上め^下を^上又^下
 一^下つ^上ら^下も^上わ^下あ^上り^下と^上記^下す^上る^下に^上り^下て^上
 久^下し^上其^下が^上ま^下さ^上り^下く^上た^下る^上成^下経^上康^下頼^上を^下
 言^下ふ^上る^下は^上計^下あり^上の^下事^上なり^下と^上思^下ひ^上
 や^下り^上も^下母^上を^下と^上巻^下み^上て^下入^上る^下僧^上部^下
 後^下實^上を^下か^上き^下る^上文^下字^上の^下更^上よ^下あ^上

かあーらよまきううお母の纜下
取つておとせし舟
舟人かきつ家

をまきつて母さかかよきおん
きつて海よめあううづまを合て
舟よあふヨソ舟さうとのきよき
しつら及び後實言 本乃清よひ
きつて松浦らよ姫并我乃よらも

まうとさもわらまのあはた新
痛りう事や我ら都よりあを
うらやうあうらうらうらうら
あふくし心づくと物さく多カヅレ路を
まてうらうらうらうらうらうら
まう陰よまきあうらうらうら
あやかきうらうらうらうらうら
後實言

俊寛

九絶

申あはれもなぐ
 頼むや又頼む
 海に其の波も
 波乃無ある聲
 ききてみえの
 なる成よきま

松の村

曲生二拍子
 位深六ヨリ立收
 破序
 意兼表傳
 福

早白

是の諸國一見乃僧より我未西國を
 三の人の福よ汝度思の立西國行脚と
 為して作さる福よ早さる也津の國
 と海乃浦とやいふ是成碎きを
 足れは板有まの松のいがる程謂乃
 ありての早まは汝ありの人の尋ね

松風

もと思ひけり 梅の枝にさし入る花
村のさき二人のあはれ涙も痛りや
具方へ中よ埋まぬ花名もあはれ
あはれさき色色の松一丈緑の
花をのこさずなりあはれさき
入る花よさきさきさきさき
さきさきさきさきさきさき

程遠くはかりこも是れ成る海乃塩屋よ

立もよ一花を明いともさきさき
塩屋の車もさきさきさきさき
あはれさきさきさきさきさき
海乃たさきさきさきさき
海乃すさきさきさきさき
六 岸吹さきさきさきさき

乃夕何ぞも梅の咲く時
 幽き月がほ
 ちいさな魚舟のつぎを
 幽き月がほ
 かりの浦もある島野
 塩田の行
 空かたの可の杖あり
 まるき
 くらげもあ
 しく塩をほく
 げよみらひの志ほ
 衣乃
 神を結ん
 清のき
 思ひも

乃夕何ぞも梅の咲く時
 幽き月がほ
 ちいさな魚舟のつぎを
 幽き月がほ
 かりの浦もある島野
 塩田の行
 空かたの可の杖あり
 まるき
 くらげもあ
 しく塩をほく
 げよみらひの志ほ
 衣乃
 神を結ん
 清のき
 思ひも

松風

上野地

影を汲りてあまきく
 遠く陸奥の具名も
 身が塩木をせしり
 塩 具名の海乃さ
 世も出も世も 松乃村
 塩路やきくなる
 家なるほの松乃月

人あきもつきの
 月乃り月乃り
 月乃り月乃り
 月乃り月乃り
 月乃り月乃り
 月乃り月乃り
 月乃り月乃り
 月乃り月乃り

主の錦もて。客もさし。おもひ思ふ。
 ぞ。よ。見。成。塩。屋。入。り。し。り。入。書。の。下。伏。
^ツ神。さ。く。渡。り。る。そ。是。ハ。諸。國。一。見。の。
 僧。さ。て。た。夜。の。宿。せ。は。つ。く。普。家。
 作。あ。ら。ま。あ。せ。も。さ。く。つ。ら。ま。の。橋。
 人。の。こ。り。い。の。あ。の。も。宿。に。行。る。何。り。よ。
 見。さ。る。塩。屋。さ。く。程。よ。も。宿。の。下。り。よ。

入。り。し。り。入。書。の。下。伏。
 ぞ。よ。見。成。塩。屋。入。り。し。り。入。書。の。下。伏。
^ツ神。さ。く。渡。り。る。そ。是。ハ。諸。國。一。見。の。
 僧。さ。て。た。夜。の。宿。せ。は。つ。く。普。家。
 作。あ。ら。ま。あ。せ。も。さ。く。つ。ら。ま。の。橋。
 人。の。こ。り。い。の。あ。の。も。宿。に。行。る。何。り。よ。
 見。さ。る。塩。屋。さ。く。程。よ。も。宿。の。下。り。よ。

福よ縁あり吊しむ松浦のしるし

意よりおむね松浦のしるし

二人よは松浦作是し行ふも

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

卯の顯きさあ松浦のしるし同人

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

松浦のしるし ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

あつらひ ニ上 ちかむあはれの色

うらやみしつてはるまじいしりくたきくたき
 けいけい松陰の言ひきつるあはれ
 しあきをつる松風村の二人の女の悲霊
 見しよてまをさるる信も行平三三の
 福はつまじく乃弟松ありて月よのき
 まぬの浦よりほそきふあはれ
 だごしきしりしあはれつぢまはれ

名あまやうて松の村ありて
 あもあはれまぬの海入堀の中
 さもりのまありたあり
 三年ともいふまじい行平都のあり給ひ
 けいけい福あて世よりやうま
 あはれあはれまも又らつるあはれ
 つまじい下白松風も村ありて

ちやもあなまのなりのあせも
 のりよつかりし飾りりきたはひら
 霧のうきもほろりもたしきつ
 ねもよあれ衣のこも目もつら
 してののきもほろりもたしきつ
 ちやもあなまのなりのあせも
 のりよつかりし飾りりきたはひら
 霧のうきもほろりもたしきつ
 ねもよあれ衣のこも目もつら

ちやもあなまのなりのあせも
 のりよつかりし飾りりきたはひら
 霧のうきもほろりもたしきつ
 ねもよあれ衣のこも目もつら
 ちやもあなまのなりのあせも
 のりよつかりし飾りりきたはひら
 霧のうきもほろりもたしきつ
 ねもよあれ衣のこも目もつら

思スミまリてハ秋アキのノ吹フりハもハかキまシてハ秋アキの
 竹タケのノ葉ハもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 立タテ寄ヨりハ起キすハわらわらしクもハ秋アキの
 責ツクみハしテもハ置キまシてハ秋アキの
 昔ムカシのノ三サン東トウのノ葉ハもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 もハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの

文今
おん

新ニちハあらはしましてハ秋アキの
 松マツのノ葉ハもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 判ハりハもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 志シのノ葉ハもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 給ツクまシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 父チチもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの
 しハもハあらぶシてハもハ置キまシてハ秋アキの

松風

松風吹く松の葉を
 づらね鈴ひの言の成るあま
 海にわたる舟も漕ぎつら
 松の立海は音信
 村の神志り
 松の葉を吹く
 舟も漕ぎつら
 松の立海は音信
 村の神志り
 松の葉を吹く
 舟も漕ぎつら

ツメ

松の立海は音信
 村の神志り
 松の葉を吹く
 舟も漕ぎつら
 松の立海は音信
 村の神志り
 松の葉を吹く
 舟も漕ぎつら
 松の立海は音信
 村の神志り
 松の葉を吹く
 舟も漕ぎつら

松風

乃夢よりさるるあり我ありていふ
 給へん心もあはれなる浪乃言の聲
 うかきそ吹やうら乃山程の海
 路乃身もさるる夢もぬるあり
 ありきく村ありきく今月を
 松乃さるるやのさるる

西行様

花見流
 比詩えたる松乃りく山路乃去り
 いふり母もか様あり者下京邊
 位若はる者ありく作らるるも我書
 山野より日よるる明日もひり山
 地まららるる見はるる今白き

又西山西行の菴室乃花盛あつて
取女作福よ花入る人こもさあひ

おとあし西行の店室へと急作
妙百手島ゆつと書あこもさあひ
あつたまりゆ日救つて比もさあひ
やあれやあままりて花の女はつ
もあもさあをまだまも花あれ

三三三男行

あれくこも福よれさあ
西行乃店室よさて花皆あは侍

あつたまりあままりて花の女はつ

あつたまりあままりて花の女はつ

男

あつたまりあままりて花の女はつ

菴室乃花盛あつて家あつて

是まてまりて作るこもさあひ

西行 草子 同くはるるを 梅割して去

あはれをきくはるるを 梅割して去

おきての雪はゆき 男 草子 梅割して去

花さよ味する葉の 梢よありけれ 中下

月下に味暗なる 妙よありけれ 中下

ゆきつよふ依の 夏もたかく 宿感か

松の月一聲の 秋をもよほさる

草子 梅割して去 見ゆきは 結縁

たりの去あへり 何れもよほさる

花さるるあり 日本

一乃法まじし 何れもよほさる

あるよ 何れもよほさる

何れもよほさる

何れもよほさる

草子

花のうらみはなほおもはれぬ
 給ふもかゝるに^おしるは^おしるは^お
 花盛の心はさきかき西行の心
 室の花はさきかき^おしるは^おしるは^お
 およびたかき^おしるは^おしるは^お
 花のうらみはなほおもはれぬ
 給ふもかゝるに^おしるは^おしるは^お

花のうらみはなほおもはれぬ
 給ふもかゝるに^おしるは^おしるは^お

花のうらみはなほおもはれぬ
 給ふもかゝるに^おしるは^おしるは^お
 花盛の心はさきかき西行の心
 室の花はさきかき^おしるは^おしるは^お
 およびたかき^おしるは^おしるは^お
 花のうらみはなほおもはれぬ
 給ふもかゝるに^おしるは^おしるは^お

外あれし^ト花^ニと^シま^シく^人ら^らお
 乃^ミき^あら^し梅^のが^らよ^きあ^りら^る
 高^ク梅^のか^きら^ちて^月は^あら^まの
 来^りた^すよ^家路^のす^まし^ても^あら^まの
 こ^らひ^の花^のま^じり^とあ^らま^の詠^め
 埋^まら^しめ^られ^し身^を
 志^すめ^たら^し花^のあ^らま^の詠^め
 志^すめ^たら^し花^のあ^らま^の詠^め

心^にし^まし^く人^のら^らあ^らま^の
 梅^のあ^らま^の詠^め
 たら^し花^のあ^らま^の詠^め
 あ^らま^の詠^め
 中^の翁^あら^まの^詠め^を
 花^のあ^らま^の詠^め

夢中ノ翁ハ云ク昔々人歎シ
^カうれしうてもさる人ノ詠テの

たり程ニ也ハ歌ヲしル也ハ
^テカ

也上人ハ多ク行ク不審ノ事
^トカ

あれども昔々人ノ事ハ
^トカ

舟橋ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

也ハ昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

いふに昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

うに昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

あつて昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

いふに昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

人ノ事ハ昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

花ノ事ハ昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

是ハ昔々人ノ事ハ昔々人ノ事ハ
^トカ

ボヤきやう極花其の精

誠

花乃精あうが洗身もたよ若た乃梅の
花也いもぬ草木あれも
いふれをうよもあ乃
引こひあり
花ももくあ枝打ちあたう梅の
どう乃あさうしとPひくく花乃

ていあり花さうあさ木も花さの
花うわもれも卓木固去皆成佛の
即法ある一
引糸や上人乃所

値馬よひわぐぐまの露あまねく
花檻前よ
林下よ
朝よ落花をさして相侍て

二下
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 廿一
 廿二
 廿三
 廿四
 廿五
 廿六
 廿七
 廿八
 廿九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

蔵子六苑鳥は随つて一時子錦家
 九室よりきとも花乃やへ桜づく世乃
 喜とかりあへん
 高きまわつ初花を多くあつた衛乃
 しろくろく名かたつと及柳桜をま
 ませく都の雲乃錦ら母らんだ
 ぶたのりくを植てきり乃かを

可乃名よあひる平本乃花らり
 雲路やあまのりかたつと及柳桜をま
 ませく都の雲乃錦ら母らんだ
 ぶたのりくを植てきり乃かを

又いふ所のの誓願は日をも都へ
 といふ所のの誓願は日をも都へ
 乃山をうききよきよきよきよ
 開寺の外なるうききよきよきよ
 て寺もはあれきよきよきよきよ
 寺りく急行する具しつや都
 誓願寺へきよきよきよきよ

法乃力として貴賤相集のきよきよ神
 寺りく急行する具しつや都
 乃山をうききよきよきよきよ
 開寺の外なるうききよきよきよ
 て寺もはあれきよきよきよきよ
 寺りく急行する具しつや都
 誓願寺へきよきよきよきよ

響三三三聴三三三人三三三音三三三 沖三三三の三三三松三三三尾三三三 甲三三三
き三三三く三三三や三三三 か三三三さ三三三れ三三三流三三三 海三三三陸三三三頼三三三を三三三
心三三三き三三三誰三三三も三三三さ三三三く三三三色三三三ら三三三ん三三三ん三三三さ三三三ら三三三ら三三三よ三三三す三三三さ三三三ら三三三
下三三三草三三三の三三三傷三三三よ三三三ま三三三あ三三三ん三三三ま三三三ま三三三て三三三行三三三疑三三三ひ三三三
あ三三三ち三三三ら三三三ん三三三ま三三三が三三三う三三三難三三三や三三三か三三三ん三三三ん三三三ま三三三ま三三三え三三三
格三三三ひ三三三ま三三三る三三三た三三三る三三三ま三三三ま三三三ま三三三ん三三三ん三三三ん三三三の三三三
声三三三れ三三三さ三三三い三三三ち三三三か三三三た三三三も三三三さ三三三く三三三 女三三三音三三三
女三三三音三三三

女三三三音三三三
上三三三人三三三よ三三三ん三三三か三三三ら三三三い三三三る三三三 女三三三音三三三
沖三三三れ三三三ら三三三い三三三る三三三ま三三三ま三三三ま三三三 女三三三音三三三
有三三三め三三三く三三三十三三三万三三三人三三三より三三三あ三三三ら三三三は三三三ま三三三ま三三三よ三三三編三三三入三三三
つ三三三ま三三三や三三三流三三三れ三三三ま三三三い三三三く三三三も三三三不三三三審三三三よ三三三ま三三三ま三三三ま三三三 甲三三三
さ三三三ら三三三ふ三三三く三三三不三三三審三三三の三三三あ三三三ら三三三は三三三ま三三三ま三三三ま三三三三三三三無三三三窮三三三
乃三三三は三三三夢三三三又三三三想三三三よ三三三何三三三の三三三ら三三三文三三三あ三三三ら三三三ま三三三ま三三三何三三三の三三三
文三三三の三三三ま三三三ま三三三ま三三三ま三三三ま三三三ま三三三の三三三た三三三ら三三三は三三三 三

之付くろが波きけは南無阿彌陀仏
 と此よりなり也女 抄曰く乃
 文とやしきなるゆゑもくもゆゑ
上 ぢりゆの抄よりきりぬ中 して
 語てゆのきりぬは字々号一編は
 十界依云一編抄萬行勸念一編抄
 人中よく妙好華此回句乃きしつ

上の字あれ九 六十萬人と書る
女 たり今女 不審云乃其
 圖をも照ひは院の教へ上 引用遍照
 十方世界よもる下 心あるは法を
 づりよ六十万人と人数をいへ
 定む女 抄りやゆゑなり此
 中の六十萬人具人教と打捨て

早早に改定は自南無了局早に引女く
 筋入をともあふ引く是母はての
 信信ありや竹上もはらうとて
 南無ありて唱ふれ佛も我も
 ありきやうあてあへるの聲
 つり至誠誠心深心也向發願の鐘の色
 耳よりみくらる種種や誠誠はあはれ此教

十拜ありて色救わる気悟りをも
 てもあふ給うする種種なるは
 夕陽雲まきつらひく西よりきこ
 けつ月月のよるの念念ひを急ぐは念念ひ
 をいしやあみせや更けらわら
 念佛の聴音の眼り危しむや鐘
 ありて念念ひもや引引く五障の

雲乃初々々身をたまたまきぬり決せり
 二世安樂の國よもいせし行ひを娘さ
 京安樂の國あまもあくまらる蓮華
 乃皇の縁有誠ある有効やく
 りがみもていせの國すまき
 通る頼る誠洗を
 或も利益無量罪又の経の後の

世も一教と一おをさうろ
 有り万諸の教皆得あり
 乃洗浄本するも上人も
 法華の寺に佛と上人を一持
 ありあるま上人ま
 行事うきうき誓願寺と打
 願とのま上人の清も
 六字乃

名号よありて珍しく 甲 是のま

ぢるふと承りおの昔より誓願寺と

うらたる顔とのまの字のうらま

まのつとむ思ひもくあ事うく作

甲 乙見も流本まのはまのま

甲 りも流本まのはまのま

くま住人 甲 誓願栖のりる塔あり

甲 かくまもああり石塔の和泉式部乃

は墓と社あり 甲 誓願すまの不審あり

甲 ありのま不審まのまの 甲 我も昔を

此寺の値遇のあまのま 甲 此のまの

秋やか 甲 誓願すまのまの

名号あり 甲 誓願すまのまの

と人よ 甲 誓願すまのまの

神下の心下に塔下の火下乃下克下也
或下の支下乃下まき下り下く下佛下説下乃下まき下り下せ

誓願寺と打たる額下のまき下六下字下乃下名下

号下と書下付下て下仏下家下乃下う下つ下し下也下

少下も異下音下意下し下つ下妙下也下

く下り下音下樂下乃下か下ら下る下乃下名下也下

乃下又下復下乃下ま下き下り下も下存下乃下の下心下乃下ま下き下り下を下

頼下乃下鐘下乃下同下音下乃下南下字下

乃下又下復下乃下ま下き下り下も下存下乃下の下心下乃下ま下き下り下を下

名下乃下也下乃下末下世下乃下名下乃下海下度下乃下為下乃下仏下乃下

乃下又下復下乃下ま下き下り下も下存下乃下の下心下乃下ま下き下り下を下

乃下又下復下乃下ま下き下り下も下存下乃下の下心下乃下ま下き下り下を下

乃下又下復下乃下ま下き下り下も下存下乃下の下心下乃下ま下き下り下を下

乃下又下復下乃下ま下き下り下も下存下乃下の下心下乃下ま下き下り下を下

比に... 誓願
 菩薩の法よ... 證悟たあ...
 夕日歌... 帯乃... 火のきき...
 あり... 哀... 極楽世界...
 可... 難... 柳當寺...
 中... 智... 入...
 慈悲萬行の... 明...
 乃御作... 佛...

水波の隔あり... 然...
 歌... 一身...
 海... 舟...
 度... 西方...
 了... 標...
 等... 遠...
 来... 亦...

浄土の法華一經と西方の淨土經
 慈眼視之其ありしれども
 視世無二世利益同一淨土
 かため乃悲教あり
 若我成佛乃
 ぞうとせうくつよの人乃つり力よ
 かくも去り時舟のこもあす掉りて
 も復ら波舟よ
 樂と極る

淨土の道あれや
 雲も空も
 去りきり
 極る
 佛の
 獨あて佛の
 歸る法乃場

誓願
 此の御書は
 神代卷の
 皇書と
 流るるも
 貴き人の
 手紙なる
 事なれば
 かくも皆
 ありき事
 瑞り耶

謔本雖多廿四依右章句
 誤と亦以觀世方也
 正文寫之并加當流秘密
 と改板也

十時貞享冬 丙寅年九月吉日

二條通河幸町西入口

山本長兵衛新板




